

122年20  
148号



同人雑誌編集部発行 三田 吉野の親善会でも取りたい  
〒108-8336 東京都港区三田2-1-45 慶応義塾大学内  
三田文庫編集部 同人雑誌評係

### 加藤有佳織

竹野滴「だいじょうぶ!」(『葵笛』第十九号)が描くのは、介護職員として「ある鈍感さを身につけた」貴弘です。ある日、彼が勤務する作業所で、利用者の大久保期大がいなくなります。シヨータさんがいないと気づいたのは同僚の早田です。貴弘は彼女の不安と緊張を察知しながら、まだ「危機感が遠い」と感じています。「ついさっきはその姿を目にしていただけがある」ものの、所在確認表の「だれでも書きうる」丸印を見ると、「さっきはいつなのか、ほんとうに今日のことなのか、あやふやになりはじめ」のでした。送迎バスの運転手からシヨータさんが乗っていないと言われ、「何を見たのか」と自問します。その日の作業分扱は顔写真付きの名札によつて示されており、シヨータさんの名札はねじの仕分けの欄にあります。自分が「見た」はずのシヨータさんは、名札の彼だったのか、実際の彼だったのかと、貴弘は「ひどいうろたえ」を覚えます。濃度を増す焦りと緊張のなか、矢野さんという利用者とともに、シヨータさんを探しに出かけますが、渋滞に巻き込まれ、不在のシヨータさんについて考えるほどに「離れていくよう」に感じます。「大丈夫!」と

「だいじょうぶ!」のちがいを聞き分ける鋭敏さともどかしい緊張感とが共存し、断熱材に包まれたような貴弘の思考をくり返し追いたくなる引力がありました。

後藤高志「だんだんと夜になるリズム」(『カム』Vol.19)では、「じつとひとり身を潜めて」生きていくと思っていた橋成夫が、加代と付き合ひ、彼女とその息子の啓太と「もつと」一緒に過ごす。古い一軒家で祖母と母と暮らしてきた成夫ですが、祖母は亡くなり、母は認知症のため入院しており、毎週見舞う成夫が誰か分からずいます。母を理解できないまま、そもそも人は「お互いにわからないまま過ごしているのだ」と彼は感じています。それでも、加代と啓太と自分、そして母のいる暮らしを形づくろうとし、加代の夫になるでもなく、啓太の父になるでもなく、ただ彼らの「普通の毎日」に少しずつ参加していきます。静かに迷いつつ問合ひを慎重に測つて関係を築く成夫の造型が印象的でした。喫茶店で初めて啓太と会ったときの乾いてしまったショートケーキ、加代が仕事に出る平日の昼に初めて家を訪ねて作った少し焦げた餃子。加代の母が訪ねて来たあと、加代が「なんかもう、だるいわ」とぼやき、近くの店へ買いに行つた焼き鳥と唐揚げ。食べものにも質感と説得力がありました。

虎舌カン・中野真「フルリアント」(『E』34号)は、同期入社し総務部に配属された田中と営業部の異が語りま

### 佐々木義登

吉永ケイト「竹の家」(『E』35号)は主人公の六子が、二十数年前に見合い結婚をして田舎に嫁いだ叔母十和子さんを訪ねる物語です。六子は不動産の仕事をしており、移住を考える人のための物件を探す目的で田舎を訪れ、叔母の家に泊らせてもらおうのでした。夫の和夫さんと義母、近所の老婆との出会いがありますが、特別なことが起こるでもなく十和子さんの嫁ぎ先での家事の様子が淡々と描かれます。そこに田舎へ嫁いだ叔母の二十数年の時間があぶり出されるようです。家の目印のように生える樺の大木、張り巡らされるホソバ囲い、そして地下室を蔓延らせ勢力を伸ばす竹、それらが象徴的に描かれます。一見穏やかな暮らしぶりに見えますが、背後には田舎の同調圧力や血のしがらみ、そして旺盛な生命力の孟宗竹が不穏に迫る様子が描かれていました。何も起こらず何も書かれていないようで、逆に人間というものの営みが全て凝縮されている見事な作品でした。

竹野滴「だいじょうぶ!」(『葵笛』第十九号)の主人公貴弘は作業所で利用者のお世話をする介護者です。その日の朝見たはずのシヨータさんという利用者の姿が見えない

ことに気づきます。同僚の早田さんを残し、別の利用者の矢野さんを車に乗せてシヨータさんの行方を捜すこととなります。最後の場面でシヨータさんが発見され「貴弘はシヨータさんの不在を、今はじめて知った」という一文で小説は閉じられます。実はそれまでシヨータさんが複数の認識とともに存在し、かつ不在でもあるかのように描かれています。事実は容易に認識されない。あらゆる出来事の不確定性と「知る」ことは常に遅れて到来するというテーマが「だいじょうぶ!」という大胆な言葉で射抜かれる様が大変印象的です。内容の軽妙さとは裏腹に哲学的な奥行きを抱えた作品でした。

水無月つらら「同世」(『星座盤』Vol.15)はコロナ禍で離職した女性が、マッサージ店で働き始めるというストーリーです。店長や彼氏の智雄にサポートされつつ、トラブルを乗り越えマッサージ師としてひとり立ちしてゆく様子が描かれます。高い文章スキルで、リーダビリティに優れていました。未経験ながら新たな仕事と懸命に向き合おうとする主人公に多くの読者が共感するでしょう。しかも本作が苦境の中で自立しようとする女性たちへの単なる応援歌にとどまらないのは、現代日本の社会構造に潜むひずみを鋭くえぐりつつしているからだと感じました。

後藤高志「だんだんと夜になるリズム」(『カム』Vol.19)の主人公成夫には若年性認知症を患い入院している母がいます。母の見舞いの道すがら、病院近くの靴屋で店員加代

つかず離れずの距離を保ちながら遊弊する日々をやり過していましたが、上司の叱責が最後の藁となって田中は退職します。その後偶然に再会する場面が余韻深く、友人を気づかう余裕のない自分を悔やむ裏が、田中には「屈託のない笑み」を浮かべているように見えます。再会した二人のやりとりで「他人のことを本当の意味でわかることはできない」ということがよく描き出されていました。

桐葉祥子「わらし母さん」(『雑記離子』第26号)には三世代十一人の大家族が登場します。この家族には不思議があり、全員が揃っているとき「何回数えても十人になる」のです。なぜ十人になるのか、その秘密を共有する兄弟姉妹が使命感と心細さを抱える姿が愛おしいのですが、同時に、お化け屋敷の興行を生業とする一家からは人ならざる気配が醸し出されます。家族の物語と妖怪譚のマッシュアップと表現すればよいのか、魅力的な作品でした。

中野雅丈「根岸疾走傳」(『組香』第6号)は、慶応三年初夏、長らく馴子として馬を世話してきた清右衛門が、浪人を名乗る淡川仲基の協力を得て、馬の速さを競う頭木を描きます。育て上げた駿馬の星葉蘭を根岸の馬場でフランスの牝馬破座羽と競わせますが、その勝敗をめぐる清右衛門自身の言葉「あのとき、あの場所で何があつたのかは、そこに居合わせた者だけが憶えていればよいこと。それで十分であるよ」が胸に響きます。

丸責うりほ「透明感あふれる美老男」(『星座盤』Vol.15)は、「年をとればとるほどはかなさと透明感が出てくる」老翁の男性が「か弱い存在」として美少女に代わりもてはやされる芸能業界を空想します。安田美貴は、娘の未留久を美少女モデルとして売り込もうとしていましたが、芸能事務所からはむしろ祖父を「清田透明感」としてプロデュースすることを提案されます。黒いエトモアで笑わせつつ、ぬたつとした生々しさを伝える作品でした。

坂本幸子「雨あがり」(『樹林』Vol.67)の語り手は、三十年ほど配種業を契約しています。雨のなか点検に訪れた担当者ミナイさんを前に、ふと小学生のときに同級生を傷つけたことを思い出して告白します。軽い励ましを期待していましたが、雨が上がつて酔するミナイさんは「ずっと覚えていてください」と言います。軋を残す小品でした。

島海美幸「森」(『龍舌蘭』第20号)は、我が子の「愛し方を知らない」女性が語り、その孤独が凝固したような作品でした。津木林洋「今ここに在ること」(『せる』第17号)は、コロナ感染症が死のありようを変えたことを描いています。近しい人を亡くすこととどのように向き合うかを描く作品が目を見くろく、黒澤絵美「朝霧の中で」(『文庫歩道』Vol.107)や森岡篤史「異端路線図」(『R&W』第30号)が印象的でした。山上の「ソアラノ」(『文芸エム』第4号)や内藤万博「鬼百合」(『六伽士花史』創刊号)も雄弁でした。

さんと出会い恋に落ちます。彼女は夫と離婚し、不登校気味の小学生の息子と暮らしていました。成夫は加代さんとの関係を深めますが、結婚という選択をせず、互いの家族とともに暮らすことを提案します。慎重に距離を縮めて各々が交流を深める様子が繊細な筆致で描かれており、人間の心の機微を描くのに大変長けていると感じました。地の文と会話文が入り乱れ、混然一体となった大阪弁の語り方が独特のリズムを生んでいるのも特徴的でした。

深田杏「洗濯機を買い替える」(『たまゆら』第14号)は大学の同窓会報の編集を任せられ作業中の主人公正田のとある一日の出来事が描かれます。新しい洗濯機が家に届けられるその日に、主人公のもとにかつての旧友狩野の死を知らせる便りが届きます。そこから大学時代の狩野の回想と、洗濯機の交換作業が描かれてゆきます。古い洗濯機が持ち去られ、残った汚水を排水溝に流しながら、家族の姿が走馬灯のように現れます。そして最後には亡くなった狩野のまなざしが脳裏に焼き付いて離れない主人公なのでした。新品になった洗濯機に喜ぶ妻を見ながら五十歳を過ぎた人生の来し方行く末をかみしめる姿が印象的でした。洗濯機の交換作業と亡くなった親友の思い出という二本の平行線が、汚水を排水溝に流す場面でびたりと重なる構成の妙が心に残りました。

待鳥じゅら「森のなか」(『組香』第6号)は大学の非常

勤講師の主人公夏目が鳥の調査のため未開の島を訪れます。しかし島は不測の事態の発生で軍の支配下に置かれています。そこにアニタという女性が現れ、島に住むという謎の古代生物ウエデンダの情報を主人公に与えます。ウエデンダの正体をめぐり、部族たちのもくろみや軍の陰謀に翻弄されながら、ついに夏目はタブーを犯してしまいます。往年の香山滋を彷彿とさせる筆致で、作者のストーリーテラーとしての才能がいかに発揮されたエンターテインメント小説に仕上がっていました。

波谷真作「雲雀」(『北狄』第39号)の主人公は小学生の少年です。次の図工の時間から肖像画を描くことを、ある日授業で告げられます。肖像と聞いた少年の心に、幼い頃になくなった母の面影が去来します。失踪した母の行方は未だに分からず、精神を病んだ父は再婚、しかし継母となつた人物から虐待され、ついに家出をしてしまいます。彼の心のよりどころは絵だけなのでした。昔話のようなプロットですが、様々なディテールに焦点化されてゆくとグオトロマンを思わせる文体が秀逸で面白く読みました。

それ以外では丸責うりほ「透明感あふれる美老男」(『星座盤』Vol.15)、奥野忠昭「地下道からの午匠」(『せる』第17号)、塚田源秀「香水と暮るるみ」(『せる』第17号)、島海美幸「森」(『龍舌蘭』第20号)、森岡篤史「異端路線図」(『R&W』第30号)を興味深く読みました。